# 仙台教区報

発行所 カトリック仙台司教区事務所
980 仙台市本町一丁目2番12号
電話〇二二一22－七三七一番
編集・発行人　首藤　正義


## NICE 1'87 に向けて
## 仙台司教区からの10の提案

一九八四年、司教団は日本の教会の「基本方針と優先課題」を発表。その中で一九八七年11月第一回福音宣教推進全国会議（NICE 1）を開くことを決定。

仙台教区もナイスに向けて準備委員が任命され、去る10月25～26日、準備委員会が開かれ、以下の10の課題選定となった。

尚、課題はナイスの性格上、「日本のカトリック教会全体」という視点からのもの。

(1) 小教区教会が、信仰共同体にとどまらず宣教共同体となるために、従来の伝統的なあり方を再検討し、組織の見直し、活動様式の変革のための具体策の探求を行い、それを実施する。

(2) 司祭、信徒を含め、幼児期から老齢期までの一貫した「信仰の生涯教育」が行われるような体制を確立する。

(3) 日本人のメンタリティー、日本の文化および諸宗教を考慮しながら、日本のカトリック教会の霊性と典礼を創り出す努力をする。

(4) 日本の一般社会、人々の日常生活を踏まえたカトリック教会のあり方を探求し、真実の（科学的）社会分析の結果に基づく「開かれた教会」となるために神の民全員が努力する。

(5) 全世界の教会との連帯を現実的なものとするために、日本の教会以上に宣教者を必要としている他の国々の教会に、日本の教会からも宣教師を派遣するよう、実際的な体制を整える。

(6) 第二バチカン公会議の精神を体して、教会のヒエラルキアについての認識を新たにし、司教－司祭－信徒（修道者を含む）の相互関係についての意識の変革を目差して、相互の具体的関わり方を再検討する。

(7) カトリック教会における女性信徒（修道女を含む）の地位と役割を正しく認識し、男性中心主義的傾向を改め、神の民として共に責任を果しながら教会を支えてゆく体制を確立する。

(8) 教会のみならず日本の、また世界の将来の担い手である青少年に対するカトリック教会としての対応策を具体的に樹立する。

(9) カトリック系の諸学校（教育機関）ならびに各種福祉施設における福音宣教の使命を再確認し、その実践に努力する。

(10) 現代の情報化社会における福音宣教の必要性を考慮し、カトリック内外の広報手段の有効な活用に努める。

## 司教様の日程
（11月15日現在）

11月17日　神学生養成委員会（仙台）
18日　難民関係定例会（東京）
19～21日　カリタス・ジャパン担当者会議（東京）
21日　中央協・財務委員会（東京）
24日　塩釜カトリック幼稚園落成式
25日　スペルマン病院理事会
27日　常任司教委員会（東京）
28日　難民定住常任委員会（東京）
29日　カリタス・ジャパン社会福祉理念小委員会（東京）

12月1～2日　教区司祭団月例会（仙台）
5日　宮宗連報第2回編集委員会（仙台）
6日　社会福祉法人理事会（仙台）
8日　教区司祭団役員会（仙台）
9～12日　臨時司教総会（東京）
13日　社会福祉法人評議員会（仙台）
角田老人ホーム設立準備委（仙台）
14日　本町教会信者の集り（青森）
15日　ケベック会月例会（青森）
17日　スペルマン病院クリスマス会（仙台）
18日　カリタス・ジャパン推進部会、運営委員会（東京）
21日　ビシェ師金祝（松木町教会）
25日　主のご降誕（元寺小路教会）

## 塩釜カトリック幼稚園
## 新園舎落成

去る11月24日、塩釜カトリック幼稚園新園舎の落成式が行われた。

落成式には、学校法人理事長・佐藤千敬司教はじめ、カトリック教会、幼稚園関係者、来賓旧職員、旧PTA会長・役員等、約80名の出席で行われた。

なお、敷地面積一、二四〇、五八㎡、建築面積四九八、三〇㎡、延床面積八〇九、一八㎡、構造は鉄筋コンクリート一部鉄骨造、屋根はアスファルトシングル葺である。

## 仙台教区修道女連盟
## 院長研修会　仙台で―

紅葉が街頭に散り敷く11月2日、白百合学園の一室を拝借して、仙台教区修女連の院長研修会をしました。参加者14名。

最近米国から帰日されたクレメント師を囲んで、和やかな集いでした。

11時、院長会で平川会長から事業報告、つづいて日本の教会の動きについて、来年の福音宣教推進全国会議にむけての準備委員としての立場から、「ナイスワン'87」に関して私たちを啓発してくださいました。

クレメント師は、最新の米国教会の情報を提供してくださいました。カトリックが人口の四分の一、人材の多いこと、女性の活躍、修道召命、更に神学生の増加傾向など。

「日本の教会の信徒と修道者のかかわり」については、全員が具体例の中で、現状と明日への希望を話し合いました。

五時からのミサにおいて、聖主は、私たちへの派遣命令を更新なさいました。（村上）

司祭叙階50周年
おめでとうございます。

12月20日
ルネ・ピシェ神父様（松木町教会）
ガブリエル・グローロ神父様（平教会）

## 五十路を迎えた我が家
### ドミニカン・ロザリオの聖母修道院新築落成

岩手富士山麓を流れる北上川上流に、四十四田ダムの人工湖で、片富士湖というのがある。その中に突き出た半島形の原野の先端に現れたのが、去る11月7日に落成式を終えたドミニカン・ロザリオの聖母修道院である。

昭和11年4月ベルギーのベトレヘム修道院から6名の修道女が創立に出発、翌5月盛岡着、同14年に上田蝦夷森（現緑が丘）の修道院に定住してから今年で50年になる。建物の老朽は甚だしく、四囲の騒音に歌隊の賛美も打ち消される。

御好意の方々に援けられ、神への信頼のうちに移転の決意をしたのが4年前。苦難の山河を越えて昨年10月造成が始まった。かもしか、てん、たぬきの生息する雑木林の開墾である。今年4月からは建物の工事開始、そして11月恵みのうちに竣工。

創立50周年献堂落成式には、教皇大使ウイリアム・アクィン・カルー大司教、仙台教区長佐藤千敬司教をはじめ23人の司祭、それにシスターや信徒方、一般社会からも官公庁の方々など多くの参加をいただき、私どもの喜びはひとしお深いものとなった。新修道院の敷地面積は四九、一八一㎡、建築物は本館三、四〇〇㎡と司祭館一一一㎡。本修道院の会員は最高52名を数えたが、愛知県、福島県、香川県に創立をして、現在は32名となっている。皆様の御好意を感謝するとともに、変らぬ御支援をお願い申しあげる次第である。（西野節枝）

## モンテッソーリ東北支部大会
### 仙台白百合で―

今年も10月18・19日、日本モンテッソーリ協会東北支部大会（支部長・鷹觜神父様）が、仙台白百合学園幼稚園を会場として開かれました。

例年のように松本静子先生（AMIトレーナー）、相良敦子先生（聖母女子短大教授）をお招きし、百二十数名の参加者が、充実した二日間を過しました。松本先生の実技指導は感覚教具とその展開。そして、今年は筑波大学の井田範美先生の講演「モンテッソーリと障害児の指導」と、二つの幼稚園からスライドを交えての研究発表がありました。

幼稚園、保育園で子供たちと関っている者がモンテッソーリの精神に惹かれるのは、彼

（3ページ下段へつづく）

## 声

## 教区大会に参加して

勿来教会参加者一同

すばらしい企画と、私達が模索していた件がそのまま内容として語られ、多くの人が悩み苦しみ、そして乗り越えようと祈り努力している兄弟たちの姿に、感動して参りました。

渡部 早苗（原町教会）

先頃の教区大会のためには仙台市の皆様には多くのご尽力を頂いたことを心より感謝申し上げます。五十年の記念すべき会に参加できましたこと、殊に十五日の御ミサにあずかることができ感激して帰って参りました。ごミサにあずかった多くの人々が胸をあつくして、こみあげるものをハンカチで押さえる姿がありました。やはり互いに励まし温め合う場を機会をつくって頂きたい……そう思います。信者の多くは時には孤独（日本人の中では殊に）なりがちですから……。

これからも手に手を取って血の通ったぬくもりのある共同体に致しましょう。

高橋 章子（中2・宮古教会）

教区大会は、とても思い出深いものになりました。

「歩もう　主にあって」というテーマをかかげた中学生部会。たった7人の小さな部会ではあったけれど、それだけに、本音で話しあえた部会でした。そしてなんといっても最後のミサ聖祭、すばらしい聖歌演奏、ミサの流れ一つ一つが壮大で、とても感動しました。この一回で終らず、これから、何度も続けてほしいと思います。

小原 綾子（久慈教会）

感動的だったのは、やはり大会最後の御ミサでした。「役割は違っても、一つの体である」ことを強く感じました。正直に言うなら私は、大会そのものに大きな期待とかそこから何かを得たいという切実な欲求は持ちあわせておりませんでした。むしろ、不謹慎とも言えるくらいにピクニックか修学旅行気分だったのです。弁明するなら、「久慈教会として行く」ことに意義があると思っていました。そして勿論それは大変有意義なものでした。けれど久慈教会という小さな共同体を感じるだけに留まらず、仙台教区という共同体、更には世界を感じることができたことは、より深い喜びでした。アーメン・ハレルヤの歌のように。

飛び入り的に参加させていただいた青年の集まりでも同じようなことを感じました。同年代の信者として、皆さんの発言に共鳴するところが沢山ありました。例えば、幼児洗礼と途中洗礼の問題など。ただ大会の副題にも「教会の未来は家庭に」とあったように、これからその家庭を築くであろう我々青年の集まりの中で、それがあまり話題にのぼらなかったのは個人的に少々残念でありました。

大会の終りに、平賀神父様がご挨拶の中で「この大会の成功はまだ完全ではなく、信者の皆さん一人一人が自分たちの教会、家庭に帰ってキリストの証人になった時が、完全な成功と言えるのではないでしょうか」というような主旨の言葉を残されましたが、一か月半たって思い返してみますと、果たしてそうなるよう自分は努力していたか、はなはだ疑問であり、申し訳なく思います。まだまだ足りないな、と。

Sr石田（オタワ修道女会）

教区大会には三、四年生担当として参加しました。子供達が自分で発見する喜びを味わわせたいという意図で作業中心に行われました。沈黙の一時間を物音もさせずにすごしている子供達の後ろ姿を見て、この一人一人が本当に神に愛され大切にされていることを強く感じさせられ、彼らがそれを体験することができるようにと祈らずにいられませんでした。

（2ページ下段よりつづく）

女の深い信仰の目が、一人一人の子供の内面の要求を見抜き、それをよりよく引き出すための具体的な方法を示してくれたからです。今、その線上を歩みながら、相良先生の言葉、「子供が自ら学んでいくという能力を育て、環境を整えていく。先を見透して今の保育にあたる。学ぶことの唯一の証しは子供が変わるということ。神から与えられている心を自ら開花させていくこと」が、「一人でできるように手伝って！」と、私たちに呼びかける子供たちに対する最上の手助けなのでしょう。

## カトリックボーイスカウト 指導者研修会に参加して

東仙台教会
C・S隊長　茅野 陽一

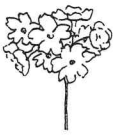
10月10日～12日、宮城町聖ドミニコ女子修道院天使園生活寮に於て、第15期カトリックボーイスカウト指導者研修セミナーが開設され、全国各地から16名のカトリック団指導者が、スカウティングと教会との関係、宗教プログラムの研究・指導法を学ぶため、受講いたしました。

仙台教区からは、スタッフとして仙台第44団の高橋県コミッショナー、仙台11団（西仙台カトリック教会）の阿部副団委員長、受講生として、わが仙台第37団から、カブ隊、ボーイ隊、ローバー隊の指導者5名、又育成団体（東仙台カトリック教会）を同じくするガールの指導者2名が参加出来たことに、感謝いたします。

指導者研修セミナーは、川原総担当司祭、日本カトリックボーイスカウト指導者協議会山口会長を講師として、カトリックスカウトの原理と方法、スカウティングと聖書、スカウティングにおける司祭の役割、教会のスカウト隊のプログラムのたてかた、日本のスカウト運動の中でのカトリック団としてのあり方等について、講義と実習中心に行なわれました。セミナーの中で強調されたことは、スカウト運動の原理は、神への務めが第一であり、創始者ベーデンパウエルも、「スカウティングは、神のチームのメンバーになって、神と共にゲームをする」という事であり、この一点で、教会とスカウト活動は目的を同じくし、「御言葉に生かされる人間を　運動を育てる」ことで一致できるということです。

ボーイスカウト運動の終局の目的は、「大自然を通じて、子供達に創造主である神の存在を知らせる」ことにあります。指導者研修セミナーに参加して、スカウト運動の本質は、宗教に根ざしたスカウティング、単に技能訓練だけでなく、心のスカウティングこそが、今、最も必要であることを改めて認識いたしました。二泊三日のセミナーが私にとって充実したひと時であったことに感謝し、これからのスカウティングに、心あらたにとりくんで行こうと思います。

## 聖ウルスラ修道会 来日五十周年を祝う



11月3日、聖ウルスラ修道会は仙台の本部修道院で来日50周年を祝った。カルー大司教佐藤司教他20人の司祭による感謝ミサに、総長はじめ、最初に来日した3人のシスターの一人Srポーリン（79歳）ら8人がカナダから出席し、200人余りの参加者と喜びを共にした。

説教の中で佐藤司教は、「会は人々にキリストを宣べ伝えるために召され、遣わされたのである。たとえ時代が変わろうとも人々の救いのための使命を忘れないように」と語り、管区長Sr大野は、「50年にあたり、自分たちの修道生活を見直したい」と語った。

## 正平協全国会議に参加して

元寺小路教会　荒賀 久仁夫

10月10日(金)～12日(日)に、札幌市のクリスチャンセンターで「第12回カトリック正義と平和協議会全国会議」が開かれた。

一九六七年にパウロ六世は、「教皇庁正義と平和委員会」を設立。それに応えて日本でも全国各地に正平協が生まれた。中央協議会内にも、相馬司教が担当司教を務める「日本カトリック正義と平和協議会」があって、キリスト者の立場で社会問題と取り組む中で、教えを実践しようと努めている。

毎年秋に、全国で活動している信徒・聖職者らが集まり全国会議が開催されている。私は正平協仙台協議会の代表として、初めてこの全国会議に参加した。

百名近い参加者の半数近くは地元北海道の信徒で占められていたが、普段正平協には特に関係のない一般信徒もかなり含まれており、地元の意識の高さを窺わせた。その中でも、私と同年代の青年が数名、受け入れ側のスタッフとして働いていたのが新鮮だった。

「共に生きる社会を目指して」というメインテーマのもと、会議二日目には4つの分科会に分かれて話し合いが行われた。「外登法指紋押捺問題とキリスト者」「日本の社会における差別と人権」「核のない世界を築くために」「アジアの民衆との連帯を考える」の中で、私が参加した「外登法…」の分科会

（5ページ下段へつづく）

192センチからの日本の眺め(8)

## 「夢を見ました」

村首ステファノ

夢を見た。日本の総理大臣がクリスチャンになった夢です。彼がイエズス・キリストの教えを重んじ、それに基づいて国のことを考えたならばどうなるのだろうか。

日本は国際化の方向に進まなければならない。天にまします我らの父がいて、日本のことだけでなく、人間はみんな神様の子供で、みんなが幸せにならなければならない。

日本が具体的にそれを実現するために、どうしたらいいのか。

先ず、貧困の問題。例えば日本はすでに農業にたずさわる人のため米を高く買い上げている。また牛肉を高く買っている。同じように、国民全体にとってちょっと大変だけれども外国からのバナナ、コーヒーをもう少し高い金で買い入れたら、それによってバナナ、コーヒーを作っている人はもう少し生活をよくすることが出来るのではないか。

それから、日本は憲法でも戦争を放棄しているし、国民も戦争をしたい訳ではない。それなら軍備費を増やすのではなく、減らすように努力することによって、その金はバナナ、コーヒーを買うのに用いることが出来る。

また同じく、私たちは皆兄弟であるという。本当の兄弟であるならば、いろんな人を日本に迎える。難民とか自分の国で生活出来ない人をもっと積極的に招待する。それから韓国人にも、もっとあたたかい目で接し、指紋押捺などを廃止し、すでに住んでいる外国人を信用する。皆、同じ立場に立っている神様の子供なのだから。

国際社会に対しても日本は自信と誇りとをもって自分たちの政策を打ち出すべきである。例えば、軍備のためにお金を余り使わない。このことは将来を考える上でも正しい道であると。またお金の無駄遣いは出来るだけ抑え、むしろそのお金を他の国の困っている兄弟、姉妹の必要にあてるべきであると。

他の国々も日本を見習って、同じように行動するならば、全世界の様々な問題も、その解決は時間の問題であると。

しかし現実は。

全世界的に言えることは、日本もその例外ではなく、平和、平和と掛け声は高く、皆、真剣に平和を望んでいるといいながらそのために積極的に何をしているか。

ひとは真剣になっている事柄に対しては金と人間を使う。日本の場合、GNP1%うんぬんといいながら、莫大な金を軍備費に使っている。これは明らかに戦争の準備だといえる。そのため皆真剣になっている。

平和を唱えながら、具体的にその平和を実現するために、国の予算の中で平和の問題をすすめるために、どれ位のお金と人材を使っているのだろうか。

このことは、アメリカにもソ連にもフランスにも言えることである。

---

（4ページ下段のつづき）

には、各地でこの問題と取り組んでいる信徒や、実際に指紋押捺を拒否している外国人司祭、修道女も多数参加し、各地における運動、とりわけ教会内の無関心や圧力との闘いなどが報告された。そして、この問題は私達の信仰の本質に触れるものであり、教会はもはやこの問題を無視して通り過ぎることはできないこと、中曾根首相の「一回押捺案」などではこの問題は全く解決されないことなどが、改めて確認された。

翌最終日の全体会では、各分科会における話し合いの結果が報告されたが、私達の分科会では今述べた内容を盛り込んだ「信徒向けアピール」を作成して全体会の場で提案し、満場一致で採択された（10月19日付カトリック新聞第一面参照）。また「差別と人権」の分科会からも、中曾根首相の「単一民族国家発言」に対する抗議アピールが出され、採択されるなど、非常な盛り上がりを見せた。そして最後に来年度の開催地について話し合われたが、来年こそは仙台で開くことが決められ、仙台での再会を期して閉会された。

現在、日程は来年の10月9日(金)～11日(日)、会場は聖ドミニコ学院ということまで決まっています。どうか来たる折には、正平協に関係のない方も気軽にご参加下さい。指紋押捺問題や差別問題といった硬い議題ばかりではなく、アジア（フィリピン、韓国）問題や平和問題についても話し合われます。特に若い方々の参加を期待します。

# スカウトはいま！

青森県
弘前教会

ボーイスカウト青森35団の活動

私たちの団は、昭和46年2月21日、弘前カトリック教会を本部として生まれました。当時の主任司祭であられた故ロベール・ヴァレー神父様が、教会の未来は若い青少年たちの健全な活動にあるというご趣旨から、教会の信徒会が中心となり、育成会を作って団を結成しました。

したがって、今でも育成会は教会が主体となっており、現在の主任司祭ジル・ランドルヴィル神父様が育成会長です。

また、青少年は、当然、男女一緒に活動するのが望ましいことから、当育成会では、男の子はボーイスカウトに、女の子はガールスカウトにということで、教会には、日本ガールスカウト青森9団があり、一緒に活動を続けております。

さて、当団も結成以来、今年で丁度満15周年となりました。

現在、スカウト25名リーダー13名、ガールはスカウト30名リーダー12名です。

年間の活動では、新年のもちつき大会、2月の弘前雪とうろう祭り参加、BIP祭4月、合同入団（入隊）進級式5月、ハイキング・キャンプ7月の水泳　8月のカブ舎営、ボーイキャンプ、いろんな大会参加、地区ラリー9月、夜間ハイク　カルチャーロード参加弘前地区スカウト展　敬老の日奉仕10月、オリエンテーリング11月、弘前子どもの祭典出演12月、教会の子どもクリスマス会冬のスキー・ソリ競技大会

このように、毎月、たくさんの行事や野外活動がありますが、スカウト達は、毎週元気でがんばっております。

その証拠に、当団のシニアスカウトは6名全員が菊章をとっております。

また、ガールスカウトも、日常、様々な奉仕活動や、生活体験活動をやっており、弘前の中心になっております。

更に、私たちの団の一番の特徴は、なんといっても、教会所属の団であるということです。ですから、私たちの活動の根本には、常にカトリック精神があります。ボーイスカウト活動も、ガールスカウト活動も、その根源はキリストの愛の精神の具現化であり、青少年に、この精神を植えつけ、はぐくむことに団活動の意義があることと信じております。

その意味で、私たちの団は、信者も未信者も一緒に、日曜日のミサ礼拝に出席して祈りをささげ、教会活動に率先して奉仕にあたり、日曜学校の子ども達とも行事を共にしております。これらのことは、今後一層強めていきたいと思います。

スカウト達が一番うれしく思うのは、子どもクリスマス会の時、サンタクロースからもらうプレゼントのようです。サンタがやってくる鈴の音が聞こえてくると、今年はどのリーダーがサンタに扮装しているか、みんなで当てっこします。やがてサンタの手から渡されたプレゼントの包みを手にして、みんな本当に満足そうな顔をします。それは、そんなに高価な物ではありませんが、子ども達のために、11月ごろから信者の方々がていねいに一つ一つ持ち寄られた贈り物なのです。子ども達は、その愛のこもった品物を手にして、教会の人たちの自分たちに寄せる気持ちを如実に感じとるのです。

私たちは、より一層、青少年の健全育成のために、カトリック精神とスカウト魂でがんばろうと誓い合っております。

さいごになりましたが、当団の主なメンバーをご紹介しておきます。

育成会副会長―葛西義司

ボーイスカウト35団団委員長―今井則三

ボーイ隊長―成田孝夫・カブ隊長―山本博文・シニア隊長―木村昭三・ガールスカウト9団団委員長―佐藤初女・正リーダー―田沢文子・

（文責　今井則三）

【編集後記】　今年は教区大会、来年はナイス、そして今クリスマス、正月、と行事に追われながらも一九八六年の幕もおりようとしています。村首師の「192センチからの日本の眺め」今回が最終です。ユニークではっきりした表現に対し、様々な意見が寄せられました。読者の皆様、村首神父様、ありがとうございました。（首）